

風評というものに
ずっと違和感を
持っていた

ひがしやま はるな
東山 晴菜

一般社団法人まちづくりなみえ 道の駅なみえ 駅長

京都府生まれ、滋賀県育ち。

大分県の大学を卒業後、大阪の食品流通小売業に就職。埼玉、大阪でバイヤーとして勤務後、2015年に二本松市の農業系のNPOに転職。さらに南相馬で1年ほど働き、2018年に「一般社団法人まちづくりなみえ」に入社。地域づくり支援員を経て、2020年開業の「道の駅なみえ」駅長に就任。

私は震災当時、大阪で有機農産物等のバイヤーをやっていたのですが、原発事故後は福島はおろか、東日本のものがまったく売れなくなってしまいました。それまでは「国産の有機野菜です」と言っていればよかったのですが、「産地はどこか」「何ベクレルか」「大丈夫なのか」「ラベルはどこで印刷されているのか」といった隅から隅まで聞かれるようになったのです。生産者の方が悪いことをしたわけでもないし、そんないわゆる風評というものにずっと違和感を持っていました。そして2015年11月、実際に福島に暮らしながら向き合いたいと思い、大阪から引っ越してきました。浪江では今、毎日風景が変わっています。震災後そのままだった建物が解体され更地になる一方で、新しい家が建ったり、子どもたちがふつうに走りまわっている姿を見かけたり。私も移住者の一人ですが、他所から来た人も、戻ってきた人も、農業だったり漁業だったり、ここにはいろいろなチャレンジができるフィールドがあります。これから先、元通りにはならないこともたくさんあると思いますが、過去との比較ではなく、この町を愛して過ごしている方が、ここでの暮らしを楽しむことができればと思っています。



浪江町に移住しコミュニティ再生に取り組む中で、道の駅の必要性を感じたという

